

副学長 電気・電子情報系教授  
石田 誠 (いしだ まこと)

開学間もない、1期生の4年生が研究室配属された1979年(昭和54年)から、37年間、本学でお世話になりました。教務職員から助手、講師と全ての教員職を経験させていただきましたが、あっという間のように感じられます。天伯第4巻第5号(通巻第22号、昭和58年、137-138)から天伯には幾度か寄稿させていただいていますが、1983年のこの記事が最初で、懐かしく最も印象的な記事と再確認しました。初めての海外国際会議発表での事件でしたが、この体験を乗り切ったことが、その後の本学での様々な活動を支えてくれた糧の一つと思います。若い方には、一読をお勧めします。(詳細はお聞きください)

「88番目に設立された国立大学として、伝統ある大学と同じことをしては、88番目になってしまう」との初代学長の榊米一郎先生の言葉が、若い私の脳裏に焼き付きました。今でも見学案内の最初に使う言葉です。1期生と電子デバイス大講座の先生(中村、西永、安田、松浦、服部、朴、石田)で2インチの半導体ラインをNECの生産技術の方方と立ち上げ、トランジスターが動いたとき、クリーンルームで万歳をしたことが思い出されます。(写真1)

紆余曲折を経て1994年に固体機能デバイス施設という新しいクリーンルーム施設が完成し、これから本格的に研究の第2ステージと思ったときに、中村哲郎先生が突然亡くなり途方に暮れました。ここから、一番の試練の時であり、全力投球の連続でしたが、2003年VBLの設立にこぎ着け、最終的に運営・維持費を獲得できたのは最大の成果だと思っています。

その間、1999年から10年間、韓国との次世代半導体開発(JSPS-KOSEF 交流事業、吉田明先生リーダー、後半石田担当)、2002年、西永領学長とヒアリングに臨んで獲得できた21世紀COE(インテリジェントヒューマンセンシング)、そして2007年GCOE(インテリジェントセンシングのフロンティア、写真2:リヨンで採択を知る)と続けてリーダーを務めさせていただき、その成果を元に2010年本学で初めての研究所EIIRIS(エレクトロニクス先端融合研究所)がスタートしました。これは、当時の榊佳之学長の構想といくつかのプロジェクト(テニユア-トラック事業、テラモードバトンゾーン事業、先端融合研究施設棟)が平成21年の同時期に採択され、素晴らしい研究所になりました。

大変運が良いとつくづく思いました。その後の研究大学強化促進事業採択への足がかりとなったと思います。

ここに全てをあげることはできませんが、37年間全力で全うすることができましたのは、ブレイン、両腕となって私と共に悩み、努力し、支えていただいた素晴らしい方々と巡り会え、良き学生の皆さんに恵まれたことです。このように運の良い自分であると常に感じています。ここにお世話になったすべての皆さんにお礼を述べて終わりたいと思います。ありがとうございました。



1. 立ち上げメンバー(右前から、西永先生、中村先生、朴先生、安田先生、最後部左から服部先生、石田と1期生)



2. リヨンでの国際会議中にGCOE採択の連絡